Press Release

MBS Media Holdings

2023年4月28 日

各位

第 60 回（2022 年度）ギャラクシー賞（下期）テレビ 4 作品とラジオ 1 作品が受賞

放送批評懇談会による第60回（2022 年度）ギャラクシー賞の下期(2022年10月1日～2023 年3月 31日放送分)のテレビ部門で、毎日放送の1作品が「入賞」、3作品が「奨励賞」を受賞しました。また、ラジオ部門でも、MBS ラジオの 1 作品が「奨励賞」を受賞しました。

なお、入賞となった『映像’23 バッシング 陰謀論と情報戦』は、今後最終選考で審査されます。最終選考の結果は、5 月 31 日(水)に開催の贈賞式で発表され、大賞や優秀賞などが決まります。

受賞作の概要は下記のとおりです。

【入賞】

『映像’23 バッシング 陰謀論と情報戦』

放送日時：2023 年3月 26 日(日) 24:50～25:50（深夜 0:50 ～ 深夜 1:50）

プロデューサー: 澤田 隆三(毎日放送報道情報局)

ディレクター：斉加 尚代 (毎日放送報道情報局番組センター)

＜番組概要＞

新型コロナウイルスが感染拡大した 2020 年、沖縄県那覇市では男性が「チャイニーズは歩く生物化学兵器」と街頭で喧伝した。2022 年、ロシアのウクライナ侵攻前後には、「ウクライナには米国主導の生物兵器研究所がある」というロシア発の偽情報が、日本のネット上でも大量に拡散されていったという。瞬時に情報が広がる状況下、日本政府は安全保障上のディスインフォメーション対策を強化する方針を固めている。一方、戦争が長期化し世界が混沌とする中で人々の不安が高まっているのか、インターネット空間は暴力的で差別的な言説の勢いがとまらない。

2018 年放送の『映像‘18 バッシング～その発信源の背後に何が～』は、学問とメディアを攻撃して扇動する政治と呼応する人々の実態を描いたが、その続編にあたる

本作は、陰謀論と情報戦が分断や争いへ発展していく危険性を直視する。人は、自分がすでに信じていることを拠り所にして世界を理解しようとする。その心理的傾向の可視化を試みる。

『映像’23 バッシング 陰謀論と情報戦』（イメージ画）

【奨励賞】

『映像’22 奄美人遺骨を追って～昭和初期・人類学の“戦利品”～』

放送日時：2022 年 11 月 27 日(日) 24:50～25:50（深夜 0:50 ～ 深夜 1:50）

プロデューサー: 橋本 佐与子(毎日放送報道情報局番組センター)

ディレクター: 津村 健夫(毎日放送報道情報局番組センター)

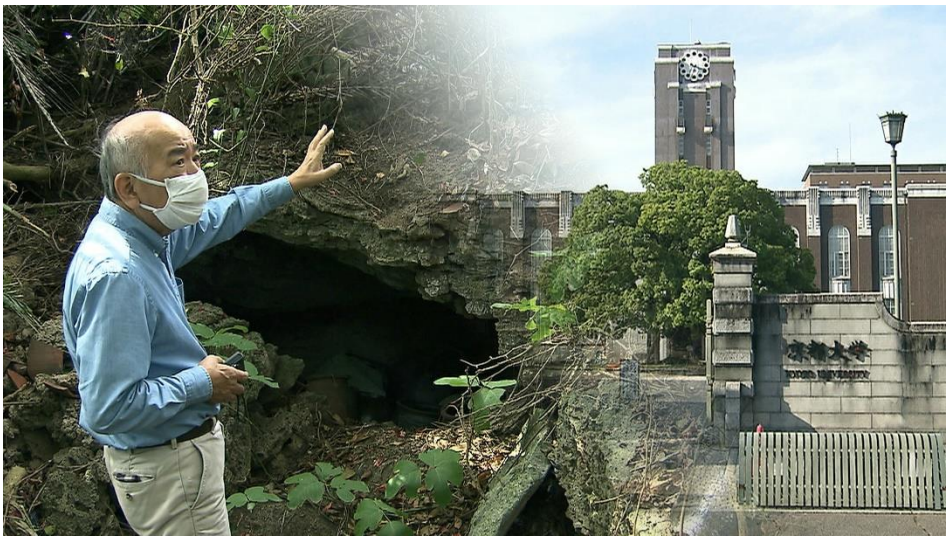
＜番組概要＞

「映像」シリーズでは、2021 年 9 月放送の「学知と骨」で人類学者により琉球・沖縄の墓から遺骨が持ち去られた問題を、2022 年7月放送の「骨は誰のものか」では北海道のアイヌ遺骨が同様に持ち去られた問題を伝えた。こうした行為は、鹿児島県の奄美群島でも行われていた。その数は 267 体。なぜ、これほど大量の遺骨が収集されたのか？

奄美大島に住む元新聞記者の原井一郎さん（72）は、2018 年、奄美での遺骨持ち去りの事実を知り、その経緯について調査を始めた。1933 年から 35 年にかけて島から遺骨を持ち去ったのは、人類学者で京都帝国大学講師の三宅宗悦。日本人のルーツを探るため、日本の「外地」とみなす地域で遺骨を収集し、その特徴を分析するためだった。しかし、島民の意に沿わないかたちで持ち去られた遺骨もあり、現在これらの遺骨は京都帝国大学を引き継いだ京都大学が収蔵している。 原井さんは、奄美の遺骨返還を求める団体を立ち上げ、京都大学に対し遺骨の返還を求めている。しかし、

大学側は遺骨の存在自体は認めたが、「詳細は調査中」として返還に応じていない。

番組では、遺骨の持ち去り現場を訪ね、90 年あまり前に何が起きたのかを記録に残すとともに、奄美の一般島民の遺骨への向き合い方をとおして、人間の死と生のあり方について問いかける。



（左）奄美大島の遺骨持ち出し現場と原井一郎さん（右）遺骨を保管する京都大学

【奨励賞】

『映像’22 鉄路の果て ～鉄道150年の向こう～』

放送日時：2022 年 12 月 25 日(日) 24:50～25:50（深夜 0:50 ～ 深夜 1:50）

プロデューサー: 橋本 佐与子(毎日放送報道情報局番組センター)

ディレクター：伊佐治 整 (毎日放送報道情報局番組センター)

＜番組概要＞

明治 5（1872）年、日本初の鉄道が新橋～横浜間で開業した。2022 年は開業からちょうど 150 周年にあたる記念すべき年だ。開業記念当日の 10 月 14 日に合わせて各地で祝賀イベントが催された一方、コロナ禍による鉄道各社の経営悪化も話題になった。JR 各社や大手私鉄は軒並み赤字に転落。連動するかのように JR 西日本と東日本が、相次いで「利用の少ない」赤字ローカル線の収支を明らかにした。沿線自治体や利用者にとっては廃線への"最後通牒"とも受け取れる。

今や「お荷物扱い」のローカル線だが、多くの路線にはかつて沿線住民の強い思いでようやく鉄路をつなげた歴史がある。戦時中の軍事輸送、敗戦後の復興、高度成長期には大量の乗客や貨物を運ぶことで国を支えてきた。

何より今の利用者の多くは、自動車免許や自家用車を持たない「交通弱者」だ。国鉄が JR となり 35 年、経営幹部は「民間企業だから利潤追求は当然」と主張する。一方で、国鉄から引き継いだ国民の財産の上に自らがあるという「公共性」が求められ

る。ローカル線存続へのこだわりを単なる"郷愁"と切り捨ててはならない。

JR に半ば疎んじられてもボランティアガイドとして毎日無人駅に立つ元機関士、人生を鉄道の安全に捧げた元保線マン、そして鉄道の可能性を発信し続ける元経営トップ・・・。番組では"鉄道員"たちの言葉から「鉄道」という巨大インフラの歴史と未来を考える。

(左)元国鉄機関士の永橋則夫さん(右上)函館本線列車(右下)木次線気動車

【奨励賞】

『マツコ×モモコのすっっっごい大阪 仲良し2人のおまかせ旅』

放送日時:2022 年 11 月 16 日(水) 20:00~21:57

チーフプロデューサー:越智 暁(毎日放送制作スポーツ局制作部)

プロデューサー:京原 雄介(毎日放送制作スポーツ局制作部)

総合演出:氏家 聡志(毎日放送制作スポーツ局制作部)

<番組概要>

マツコ・デラックスが、大親友のハイヒール・モモコと大阪の街を歩いて、食べて、体験するオールロケのバラエティー特番。2 人が行く先々では「おまかせアテンダー」と称する案内人がスタンバイ! マツコに「すっっっごい大阪!」と言わせるべく、大阪の定番から穴場までアテンド! おまかせだからこその、ハプニングとディープ大阪を楽しみます。

オープニングは天王寺の「あべのハルカス」。マツコの登場に、地上 300 メートルの展望台も騒然!? 続いては、モモコのアテンドで近鉄百貨店デパ地下と、大阪を代表する激安スポット「スーパー玉出」へ。モモコもビックリ、マツコが食べまくる!?

続いては難波~戎橋を練り歩くまさか姿に、ミナミの街は大歓声にわく!?「おまかせアテンダー」は、吉本新喜劇座長・酒井藍& トミーズ・健。誰もが知る大阪の定番「りくろーおじさんの店」で「すっっっごい大阪!」と言わせるべく、サプライズを仕掛ける!

最後は大阪 No.1 の繁華街・梅田。MBS 山中真アナウンサーのアテンドで、古き良き昭和情緒が溢れる「大阪駅前第 1 ビル」を散策!さらに北新地にも足を伸ばし、モモコ行きつけの高級鉄板焼き店で、わがままオーダー!?そして、長時間に及んだロケの締めくくりは、生放送へのゲリラ出演!!

戎橋のグリコ前で記念の1枚（左からハイヒール・モモコ、マツコ・デラックス）

お問い合わせ：（株）毎日放送　総合編成局マーケティング・ＰＲ部

MBSラジオ
AM1179 | FM90.6

【奨励賞】
『ネットワーク1・17スペシャル
即死の真相～阪神・淡路大震災28年の証言』
放送日時：2023年3月5日（日）20時00分 ～ 20時59分
出演　：西村愛（ネットワーク1・17キャスター）
室崎益輝（防災学者、神戸大学名誉教授）
亘佐和子（ネットワーク1・17 プロデューサー、毎日放送記者）

＜番組概要＞
阪神・淡路大震災では 6434 人が亡くなり、その大半は家屋の倒壊による圧死で、即死であったというのが通説である。このため震災の最大の教訓は「住宅の耐震化」

と考えられてきた。しかし、防災研究の第一人者で神戸大学名誉教授の室崎益輝さんは、「即死が大半」という通説に疑問を呈する。室崎研究室が行った遺族への聞き取り調査では、「地震発生後しばらくは息があった」「倒壊家屋の下から声が聞こえていた」などの証言が多い。たとえ住宅が倒壊しても、即死でなければ、その後の救助や医療によって命を救える可能性がある。震災の教訓は「耐震化」にとどまらず、コミュニティの助け合いなどソフト対策へと広がることになる。番組では当時のデータを再検証するとともに、関係者の新たな証言を掘り起こして、犠牲者の死の真相を探り、新たな防災提言につなげる。

番組で取り上げたマンション

お問い合わせ：（株）MBS ラジオ　プランニング部